

私の巴里 ―サ・エ・ラ― (93・9・16)

鈴木 忠敏 (昭9・文丙)

私は旅行と歴史が大好きな人間で、好奇心が人一倍つよく、何でも見てやろうと動き廻ることが習性となって旅は宿痼しゅくぐと云うか今や全く病膏盲こうもくに入った観があります。名勝旧跡の探訪なかも歴史的人物の墓参りが私の趣味の一つで本日は私の巴里―サ・エ・ラ（あちらこちら）と題して観光バスが余り行かない所を主としてお話ししたいと思います。

昭和六年、三高文丙に入ってフランス語の主任教授、折竹錫たも先生から、自分は巴里にはじめて行ったその日から町を案内した、君達もその積りで勉強したまゑと云われて早速、丸善に行つて巴里の地図を買つて書斎の壁にかけて紙上散策をしたものです。フランス留学から帰国されたばかりの伊吹武彦先生からは丁度「巴里の屋根の下」続いて「商船テナシテイ」「自由を我等に」とフランス映画が入ってきたので月に一度は先生に頼んでシャンソンを習いました。此の頃からフランスに対する特別な憧憬と愛着の心を持ち続けて居りましたが、大学を出て三菱重工業に入

社、戦前戦後を通じ三十五年の在勤中、約八割に近い期間は航空機部門の業務で米国への出張が多くて、クラスメートから一人また一人と巴里の絵葉書がくる度に切歯扼腕したものです。

重工在勤中唯一回だけ、昭和四十五年（一九七〇年）九月、十二日間のヨーロッパ出張がありました。出張の目的都市はデュッセルドルフ、スイスのルツェルン近郊のピラタス村（エリコンの子会社ピラタス航空の小型機ピラタス・ポーターの販売網を通じ三菱で国産開発したMU2ビジネス機を欧州一円に販売してもらう契約の更改契約交渉の為）、ロンドン（ファンボローのエア・ショウ見学）、ストックホルム（スエーデンへのMU2輸出交渉）で巴里は入っていませんでしたが、エアショウ見学後ロンドンで一泊する代りに巴里で一泊、ストックホルムより帰国する時巴里でもお一泊、十数時間の滞在ですが巴里へ二回行った事になりました。十時半頃、リンドバーグよろしくあああれが巴里の灯だと云う非常な感激で、オルリー空港にランディング、三菱商事が予約していたホテル「ジョルジュ・サンク」に直行、荷物を置いてそこそこに十二時近く、真昼のように雑踏するシャンゼリゼへ繰り出しました。しばらく歩いて、とあるカフェテラスに入ってレマルクの凱旋門の主人公、ドイツから亡命した医者ラヴィックがいつも飲んでいるカルバドス（フランスの労働者が愛用する強い林檎酒）と三高時代伊吹先生から伺ったオペラ帰りの紳士淑女が、家に帰る前に暖をとるために食べたというオニオングラタン（グラティネ）をとりました。此のグラティネはチーズが沢山入っていてまるでお雑煮を食べるような感じでした。

同行の商事の課長は疲れたと一足先に帰宿、私はこれからとばかりに車を拾ってモンマルトルのピガールの広場へ行き、サクレクール寺院の方へ登りはじめたのですが、しばらく行くと人影が全く無くなり身の危険を感じたので引返し商店街に入ると刺青屋が二、三軒あり、水兵が背中に刺青されているのを黒だかりの弥次馬が見物をしています。広場に戻ってストリップ劇場に入って席につくとボーイが女と飲物の注文にきました。女はことわって、三フラン二十サンチームのコンヤックを飲みながら、余りパツとしないシヨを眺めているうちにカルドバスとコンヤックの酔が廻って寝てしまふ。目をさますと三時過ぎ、ピガール広場も閑散としていて直ぐタクシーが拾えました。翌日は朝食後、支払等は同行の商事の課長に頼み、午後空港へ直行することにしてシアンゼリゼーを凱旋門から歩いてルーヴル美術館へ行き二時間ばかり見物、ミロのヴィナス、モナ・リザの微笑もさることながらダヴィド作のレカミエ夫人肖像画が印象的でした。それからセーヌの河岸を琵琶湖周航歌を低唱しながら逍遙、ポン・ヌッフを渡ってカルチエラタンで昼食。翌日ストックホルムからエンジントラブルで夕方巴里に着く予定が、大巾に遅れてやはり十時過ぎになりました。ホテルは商事で予約出来なくてストックホルムの空港でエール・フランスに頼んだので安心していたところ何も聞いていないと素つ気ない応待、迎えに来ていた商事の若い社員とケー・ドオルセイにあったシテイターミナルにバスで行くと空港の近くに予約してあるとの事、これから夜の巴里を見物、明日の午前中に日本へ帰るのだから市内のホテルをさがしてく

れと頼むと「こちらの手落ちだからと」好々爺の事務員があちらこちらに電話してくれたが、いづれもコンプレ（満員）、漸く十回目にはいい処がみつかった。モンマルトンの安宿、タクシーを飛ばして行ってみると、クリッシイの広場から坂道を少し上った閑静な住宅地帯、フロントにボーイがいるわけではなく入口のコンシェルジュのおばあさんから鍵を貰い、螺旋状の階段を三階、意外にこざっぱりした部屋でした。これから一杯飲もうと広場に出てムーラン・ルージュの前のカフェ・テラスで三時頃まで、フランス文学論議に花を咲かせましたと云うのは、此の社員と思っていた青年はアルバイト学生で、小説家希望のソルボンヌ大学の留学生だったのです。朝食をぬきにして七時、メトロでブローニュの森に行きました。なぜ行っただかと云うと、伊吹先生からブローニュの森の中の池に夜、ぼんぼりを置いたポートで逢引をする、それがシックなんだと教えられたからです。

以上があこがれの巴里に第一歩を印した時の思い出ですが、結局今日まで十八回、滞在日数の累計は四十三日になりました。

三高時代に外交官で詩人の柳澤健のジャン・ジョレス伝を読んで非常に感動、爾来私の尊敬する人物となりました。彼は日本では知られていませんが、ヨーロッパでは知名の政治家でフランス社会党の党首、ツウルーズ大学の哲学の教授から下院に出て政界きつての雄弁家、一九一四年七月三十一日、ドイツの社会党と如何に迫り来る大戦を防止するかの話合をして、独佛間の政治

折衝を斡旋中、右翼の青年の凶弾に倒れ、国葬を以て葬られたジャン・ジョレス博士。巴里市の十九区にはジャン・ジョレス駅やジャン・ジョレス大通りがあります。私は東大で政治史の岡義武助教の研究室に通い、ジョレスを中心にしたフランス社会党史の論文をまとめようとした処、岡先生が欧州留学、私も薄志弱行途中で放棄したのですが、博士が非業の最後を遂げたクロワッサンと云うレストランカフェを是非探訪したいと云う宿願が達成されたのは、一九七三年（昭和四十八年）九月二十八日であります。

その日の午後、三菱商事の支店長から運転手つきの車を借用、サン・ドニー大聖堂、カルナバレ歴史博物館、クロワッサンと順次回遊、運転手はチエコスロバキヤの亡命貴族、英独佛語が出来て歴史好きで話もはずみ、極めて充実した一時でありました。

サン・ドニー大聖堂は巴里の北、人口十数万の工業都市、共産党の本拠地、巴里をとりまく赤色ベルトの中心サン・ドニー市にあります。フランスがローマの属州であった頃、最初の司教サン・ドニー聖人が二七二年、モンマルトルの丘で斬首刑にあい、真赤にそまった首をさつと小脇にかかえ、よたよたと北へ向って歩き出し約六軒の道を歩き通して疲労に堪えかねたように前によろめいて倒れた聖人の体を、近くの農婦カチエーラ等がねんごろに葬った。そこが今のサン・ドニー大聖堂で殉教後僅か四十年、キリスト教迫害の歴史は終り三三三年、コンスタチニヌ帝によってキリスト教は公然と認められ、聖人終焉の地にまもなくささやかな礼拝堂が建てられまし

た。此の寺院が特に高い格式をもっているのは歴代のフランス王の陵墓の地になったからです。

フランス大革命の時に徹底的に破壊され惨憺たる状況になったので、ナポレオンが応急修理に乗り出し、一応礼拝に堪えるよう修復しましたが、一八六六年ヴィオレ・ル・デュクの手で現在の姿に再建されました。三フランの入場料と写真撮影代〇・五フラン払って入場、長さ一〇八米巾三十九米高さ二十九米の身廊はほの暗くて説明の字が読みにくく、陵墓を廻って一時間足らず居ましたが参拝者が一人も入ってきませんでした。一際目立ったのは北側にアンリ二世（一五五九年歿）とカトリヌ・ド・メディシス（一五八九年歿）の二層の大きな霊廟、上階には百合の花模様の盛装をつけた王と王妃が並んでひざまずいて祈る彫像がおかれ、下段の石棺の上には裸体の二人の寝姿の彫刻があり、周囲には護衛の家臣の立像、足もとには守護をする獅子や犬の彫刻が待っています。南の側廊にはジャンヌダルクが一四二九年九月十三日、バリ攻防戦で敗退した時の武器が捧げられた棚がありました。

巴里市内に入って運転手がジャンヌダルク像の前にある小さな教会によってくれました。

百年戦争の時ジャンヌダルクがシャルル七世を奉じて、ロンドンからやってきた英国の貴族とブルゴーニュ派の巴里市民のたてこもるシャルル五世の城壁の中のバリを攻撃中、堀の深さを槍ではかっている時、一本の矢がジャンヌの太股につきささり、軽傷で攻撃続行を主張したが、シャルル七世股肱の貴族達の敗退論に押しきられ、転進の途中でしばらく休んだ処で、無住の寺と

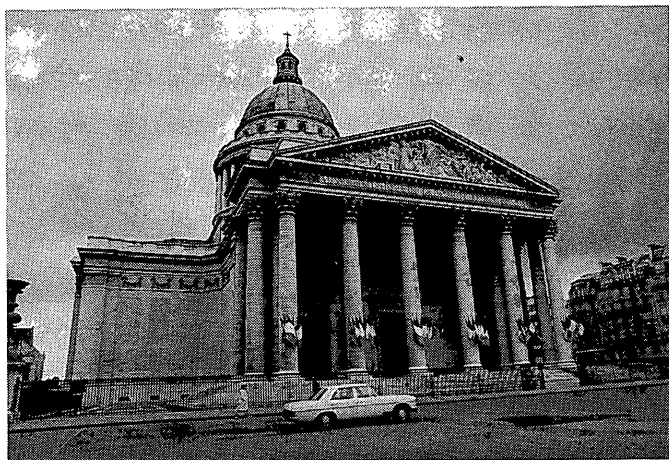
云う感じでした。

次は巴里三区にあるマレー地区のヴォージュの広場の近くのカルナヴァレ歴史博物館。

十七世紀の娘への書翰集で有名なセヴィニエ侯夫人の旧居であります。閉館三十分前と云うので館内の一部を小走りに巡覧、セヴィニエ夫人のサロンには夫人とルイ十四世からも目をかけられたプロバンスの知事の後妻となった娘の肖像画と十九世紀の文豪であり、政治家のシャトウブリアンの愛人レカミエ夫人の肖像画が印象的でした。一九八〇年（昭和五十五年）三月、二度目に行った時はゆっくり見学し、巴里市の資料、特にフランス革命の資料も多く、ルイ十六世とマリ・アントワネットの毛髪、マラー、ダントン、ロベスピエールの肖像画等々一見に値いする処です。

最後にいよいよジャン・ジョレス終焉の地クロワッサン。ナポレオンが作ったギリシャ神殿風の証券取引所や、ジャン・ジョレスが杜首であった当時は社会党の、現在は共産党の機関誌リュマニテの本社の近くの思っていたよりも小さいカフェレストラン、今日のスケジュールの最後だからと運転手をさそってスタンドに坐り、ロジェ・マルタン・デュガール作「チボー家の人びと」第七部一九一四年夏（ジョレス暗殺の状況が生々しく画かれている）を思い出しながら、ジャン・ジョレスの胸像にワインを献盃しました。

それから数年後、ジャン・ジョレスがなくなつて十年後にフランスの自由を守った英雄として



パンテオン

葬られたパンテオンに行きました。

左岸のカルチュ・ラタン―ソルボンヌ大学等の学校が集合する地区サント・ジュヌヌヴィエーブの丘の上にあります。サント・ジュヌヌヴィエーブが葬られていた寺院が、ルイ十五世によって八十三米のギリシャ神殿風の壮大なドームをいただく大伽藍^{がらん}に建てかえられ、フランス革命で教会が廃止されフランスの自由の時代の偉人達の遺骨を迎えるパンテオンになったのです。「偉人え、感謝の祖国より」とはるか高く読まれるフリーズの上にはタヴィッド・ダンジエ作の見事な高浮雕―祖国が偉人に栄光の冠を授けている図―その上に高く聳えるドームは巍然として四圍を圧しています。萬神廟^{バンテオン}内に入る
と外部に相応した雄大壮麗、シャヴァンヌのサント・ジュヌヌヴィエーブ畫伝の壁画に圧倒され

ます。地下が墓倉になっていて一基ごとに門があつてその奥に遺骸を納めた石棺や彫像がおかれて
います。

ジャン・ジャック・ルツソー、ヴォルテール、エミール・ゾラ、ヴィクトル・ユゴー、ジャン・ジョレス等、一番最後に葬られたのは今度の戦争のレジスタンスの首領ジョン・マラン。サント・ジュンヌヴィエーブは巴里の守護聖人で、いはばジャンヌ・ダルクの先輩格にあたる聖女で五世紀フン族のアッティラ王が巴里に侵入しようとした時、祈りによって回避させ、又巴里の大飢饉の時セーヌ川の上流から小麦を運んだり、数々の奇蹟を生んだ巴里の守り神、サン・ルイ島から左岸へ渡るトウルネル橋の際に立った白い柱の上に立像としてセーヌの流れを見守っています。

巴里には青山墓地や多磨霊園のような市営の大きな墓地——フランス語ではシムチエールと云いますが——が三つあります。ペール・ラ・ラシエーズ、モンマルトル、モンパルナスと順を追つて御話し致しますが、シムチエールは彫刻の森とも云うべく、日本の墓のように暗い感じがしない博物館に行ったような感じです。

最大のシムチエールはルイ十四世の懺悔僧ラシエーズ教父の住んでいた荘園のあとで、一八〇四年、巴里市営の墓地になってからメニルモンタンの丘陵地帯（巴里市内の東北部）に段々拡大して、広さは現在四十二万九千平方米、一万二千本の鬱蒼とした木立に囲まれたアンシャン・



バルザックの墓

ド・ルポ（やすらいの園）公園のような霊域であります。歴史をひもとくと、一八七一年のパリコミューン反乱の最後の激戦が行われた古戦場でもあります。

私は一九七三年（昭和四十八年）の九月十五日にはじめて行ったのですが、ゆるやかな石畳、楡の街路樹の間をしばらく東北へと昇って、左手に遠目にもそれと判る、お馴染みの文豪バルザックのブロンズの胸像をいただく墓が見えてきました。そこでゆくりなくも思い出すのはバルザ

ックの人間喜劇の中の傑作「ゴリオ爺さん」の中の最後の一節です。

ゴリオ爺の遺体をペール・ラシエーズの一角に埋葬をすませ一人だけ残った野心満々たる青年ラスチニャックが、何歩か歩いて墓地の高みに上り、セーヌの両岸に沿ってうねうねと横たわっている黄昏の巴里を見下ろしながら「ア・ヌウヅウ・マントナン（さあ、今度は俺とお前の勝負だ）」と社会

に対する挑戦状をたたきつける状景が私の脳裏をかすめました。

若き日に一番愛読した十九世紀の自然主義作家の一人であるアルフォンス・ドーデの墓がみつからない。地図によると丘の高みにある二十六区、近くのモリエールの墓まではたどりついたのですが、肝心のドーデにはお目にかかれず、昨年十月四回目に行って漸く裏側に胸像のある墓に
対面しました。

大理石の胸像つきの詩人アルフレッド・ミュッセの墓には「親しい友よ、自分が死んだら墓に柳を植えてほしい」と云う詩句が刻んであり、その希望通り小さな貧弱なしだれ柳一本がさびしくたっていました。

一九〇〇年、亡命中に客死した英国のオスカー・ワイルドの墓には翼を広げている裸の男性の彫刻が墓石の横に刻まれています。これはある婦人崇拜家が一九一二年に献じたもので、当時は良俗に反すると改作を命ぜられ、一時は白布をかぶせられていたと云う曰く付の代物、しろものこんなのが風俗壊乱とはとても考えられない極くありふれた裸体像で時代の変遷を感じました。

島崎藤村の「新生」の中で散々さがし廻った揚句に行きついたと書いてある、中世哲学界の巨峰である神学者アベラールとその弟子の修道女エロイズの比翼塚は、巴里市の観光資源の目玉商品のように宣伝されていますが、一際目立って豪華なゴシック式天蓋の御霊屋おたまやの中に、二人が並んでの横臥像のまわりにアメリカ人の観光客十数人が見物しているので藤村と違って直ぐ判り

ました。

いよいよ東南の隅の「コミュニオン連盟兵同志の壁」血染めの石塀。普佛戦争でフランス軍が破れ、ベルサリュにいたナポレオン三世が降伏したのに巴里市民は敢然として立ち上ってプロシヤ軍とフランス軍に「血の一週間」と云われるレジスタンス、コミュニオンの反乱が鎮圧されたのは一八七一年五月二十七日（日曜日）、追いつめられた市民が墓石を楯に白兵戦を展開すること数時間、最後に二百人ばかりの男女の市民が此の壁の前で銃殺されたのですが、鶯がからみ今なお弾痕のある赤黒い壁の前にはビニールに包まれた赤いバラが献花され、向い合った小高い道べに一人の日本の青年が座って静かに瞑想しているのが印象的でした。

樂聖ショパンの右向きのプロフィールの浮彫が、はめこまれた台座の上のミューズの像の右手の中指と小指が再三にわたって切り去られて持ちさられる、これはピアノが上手になるとの呪いに使われるに違いないと何かの本に書いてあったので、しげしげと眺めたが、相等に高いところでは白内障の老人には五指揃って安泰であったかどうか判然としませんでした。そこで思い出したのは千住の小塚っ原刑場跡の回向院の墓地にある鼠小僧次郎吉の小さな墓石は、博徒たちが賭事の呪に削りとるので、すっぱり金網がかぶさっていること。所変れば品変るとは違って東西人情の共通性を見た思いがしましたが、同工異曲と云うか、次郎吉の方は死んでも網をかぶらされお縄頂戴とは浮ばれない。ところで此の墓の下に埋葬されている遺体には心臓がありません。



椿 姫 の 墓

一八四九年巴里で客死し、モーツアルトの鎮魂曲の泰楽のうちに葬儀が行われる前に遺体は解剖され、心臓だけが故国ポーランドに無言の帰国、ワルショワの旧市街スタレミヤストにある聖十字教会の壁のなかに安置されているそうです。

帰り道で出口に近いところに、ロッシニーと大文字で刻まれた木の扉のあるかなり大きな御霊屋がありました。セビリヤの理髪師の音楽家の遺体は一八八七年ここから掘り出されて現在はいタリヤのフイレンツェに埋葬されているので、素通りして礼拝をしませんでした。

一九八〇年（昭和五十五年）三月十七日、ギリシヤ旅行へ行く途中、巴里滞在二日間のうちの一時を、別名「北の墓地」と云われるモンマルトルの丘から少し離れた西側の低地に、展開する三万坪のシムチエール・モンマルトルを訪れました。

私の好きな作家「赤と黒」のスタンダールはナポレオン配下の軍人で、後半世はイタリアの副領事、熱烈なイタリアマニア、お墓のどこにもスタンダールの名前は見当らず、彼のプロフィールの下に墓碑銘「ミラノの人アンリー・ベール、書いた、愛した、生きた」を判読して宿願を果たした思いが致しました。

その近くにナポレオン時代から王政復古時代にかけて一世を風靡した天下の美女、サロンの女王、さきほども御話したシヤトウブリヤンの愛人レカミエ夫人の墓がある筈とさがしましたが、なかなか見つからず、カルナバレ歴史博物館やルーヴル美術館に展示されている肖像画にうかがえる豪華なあでやかな艶やかさを偲ぶようすがもない苔むした極く平凡な、墓碑名も消えかかっている墓石に行きあたりました。

此に反して椿姫の墓は日本流に云うと香煙後を絶たずと云いますか、植木鉢や花差しに絢爛ある色とりどりの花におおわれた華やかな雰囲気です。彼女の恋人であり歌劇カメライヤの作者、アレキサンドル・デュマ・フィスの墓をさがしているとまたま「キリスト教の神髄」を書いたエルクネスト・ルナンの墓が立派な奥津城なのでその写真をとろうと思って数歩退いて、ひよいと右下を見ると、そこに大理石のベッドの上に両手を胸に合わせて静かにねむる文豪の寝姿の像をみつめました。

出口に近い十字架広場の真中に立って見廻すと小高い処、一際高く赤褐色の蠟石のアーチの中



エミール・ゾラの墓

に収まっているブロンズの半身像がとらえられ、一瞬ちよっと面白い変わったデザイン墓だなぁと持前の好奇心で数段の階段を上ってみると、これがエミール・ゾラの墓でした。下の台石の墓碑銘では夫人とマルグリット、ジャックの二人の子供と一緒に埋葬されていること、本人は一九〇二年十二月五日、ここにルポゼ（ねむった）、一九〇八年六月四日、パンテオンに移された」と刻まれています。気の毒なことに文豪ゾラは死後には家族と、セーヌ川をはさんで右岸と左岸に別居を余儀なくされ、ここは胸像だけの藻抜けの殻かたと云うことになります。

別名「南の墓地」と云われるシムチエルモンパルナスへ行ったのは一九七九年（昭和五十四年）四月五日、スペイン旅行の帰りに一日だけ滞在した時で、時間がなかったので二人に絞

ってモーパッサンとボードレールを尋ねました。

十字架の前に生年と歿年だけ彫った見開きの石の書物、その全体を覆うかのように蔦の絡まっている二本の石柱から出来ている門が立っていて、その上部に渡してある石に、ギイ・ド・モーパッサンと刻んであります。亡くなったのは四十三才、埋葬された時、棺の前でエミル・ゾラが弔辞を読んだそうです。

ボードレールの方は十字架を頭にいただいた普通のありふれた、母が再婚したオービック大将与母との墓に埋葬され、墓碑銘上半部はオービック大将の位階勲等が麗々しく経暦と共に刻まれており、その下にお副物のように息子シヤルル・ボードレールと亡くなった年月日と享年四十六才とだけ刻まれています。

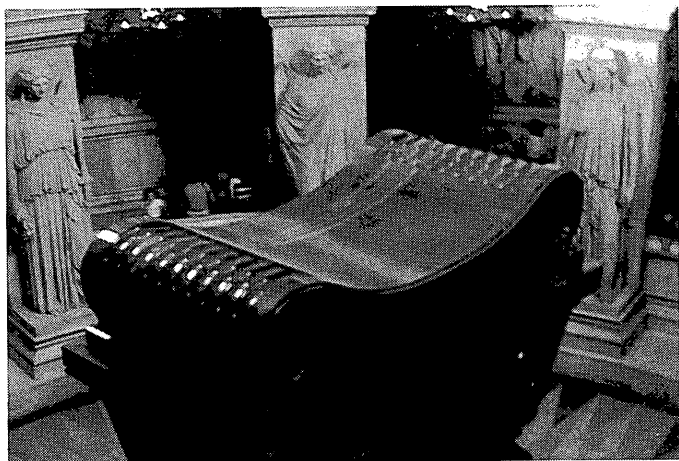
ボードレールは母を奪った男として生涯、將軍を怨み、二月革命の時は自ら民衆の先頭に立ってオービックを討てと煽動したと云われているだけに、こともあろうにオービックと共にねむらされた此の天才詩人に同情した友人達が、ボードレールの霊を慰めるために別の安息所を此のシムチエールの中に作る運動をはじめ、三十四年目にその碑が出来たのですが、時間がなくてその方は残念ながら割愛しました。

以上で三大墓地の巡礼を終り、アンバリッドのナポレオンの廟を御紹介致します。

ナポレオンがセントヘレナの孤島で息を引きとったあと、グールゴー將軍以下数人の侍従達が

墓碑銘をどうするかでイギリス側と意見対立、フランス側はナポレオン唯それだけを墓碑に認めてほしいと主張したのに対し、イギリス側は頑として此を拒否し、ジエネラル・ボナパルトとか、ナポレオン・ボナパルトならよいが、しかしナポレオと云う一語だけは絶対にいけない。何故なら王侯君主と云うものは必ず名前でしか呼ばない。たとえばジョージ五世、ヴィクトリア女王と云っているのは名前であつて姓ではない。ナポレオンと云う言葉を認めると、あとは王侯君主に列した扱いをうけることになる、結論として白地のまま墓碑銘なしで十九年間セントヘレナに眠っていました。ナポレオンは臨終に際し我が遺体は愛するフランス人の中、巴里のセーヌ河畔に埋めよと遺言したそうです。ルイ・フィリップが七年間交渉した結果、イギリスも折れて遂に承諾、王太子ジョアンヴィル公を派遣、遺体のまま持ち帰りは許されないうで火葬し、遺骨を軍艦ラベルプール号に安置、一八四〇年十二月五日、遺骨をのせた靈柩車が折からの雪の中を凱旋門の下を通り、バルザックがハンスカ夫人宛の手紙の中でシャンゼリゼーは百万人の人出、靈柩車がアンバリッドに入ろうとする瞬間虹がかかったと書いています。

第二次大戦に於てドイツ軍はなかなか味な事をやりました。丁度ナポレオンが巴里に葬られて百年後の一九四〇年十二月、ナチス占領下の巴里に二十一才で夭折してハプスブルグ家の墓に葬られていたナポレオンの息子、ローマ王ナポレオン二世の柩をウインから、アンバリッドの鉄柵まで運んできたのは夜半の午前一時、二十人のフランス龍騎兵達が受けとり、マルセーユ行進曲の演奏の



ナポレオンの墓

ひびく中で柩をかついで、地下室のナポレオン一世の柩の前に安置。セントヘレナで最後まで会いたがっていた息子と無言の対面をしました。私が最初にアンバリッドに行った時は団体旅行で上から見ただけでしたが、数年前に一人で行って行つて見ますと、一番外側が櫂、それから黒檀、鉛、マホガニー等幾重にも包まれたナポレオンの大きな柩が大ドームの真下の真中に据えられ、周囲の廊下にそつて小部屋があり、ナポレオン二世はじめ配下の元帥達の柩が安置されていました。ナポレオン二世の部屋の奥にナポレオン像が立つて床の息子の墓碑銘を眺めていました。

昭和五十八年七月、私は七十才の誕生日を巴里で迎える為に二十五日間渡仏、十九都市を歴遊しましたが、巴里北駅のビル内巴里北ロータ

リーの例会場にメーキャップの爲出席し、恒例のバー交換の時に「私は昔、正確には五十二年前に日本の古都の京都の高等学校でフランス語を習いはじめて今日までフランスを訪ねること十二回、今年は私の七十の誕生日を祝い、キャトルズ・ジュイエ（巴里祭）にマルセイエーズを皆さんと歌う爲にやってきました。古人曰く、「すべての人は二つの祖国を持つ、自分の国とフランス」特に私にとっては、と云うとブラボーと大喝采、最後に「皆さんと今日食卓を共にすることとは大変嬉しい」と云って席に坐ると、会長が立ち上って「フランスの偉大なる友人、ムツシュスキの熱烈なデイス、スクールに感激した」と握手、会員一同から万来の拍手をあげられました。こんなデイスクール（スピーチ）が出来たのも三高時代のアンリー・ガルニエ先生のお蔭で、三年の時クラスで唯一人デイススクールを試みることに、図書館で「イリュストラション」に掲載されたレオン・ブルム首相の論説を参考に婦人参政権問題の話をした処エクセランとほめられました、巴里の本場で面目をほどこし、師恩の深さを痛感した次第です。

折竹先生の伝記を執筆中の昭和女子大学の近代文学研究室の玉井美枝子教授より教えられ昨年十二月十八日、染井墓地に折竹先生の奥津城を尋ね、夕日のあたる斜め長方形のちよつと変った形の石の墓前に頷き、フランスの旅を報告し、感謝の心を以て参拝致しました。

どうも纏りのない話で申し訳なかったと思いますが、長い間御清聴有難うございました。

（元三菱重工業㈱参与航空機部長・㈱田町ビル社長・財団法人民間輸送機開発協会専務理事）